

ギター

開明高等学校 上井 颯月

父が亡くなった。部屋の中に響く母の嗚咽を聞きながら、私は俄かには信じがたいこの事実を、祖母の腕の中で呑みこんでいた。それから一週間もしない休暇の中で、父の死はあわただしく事務的に処理されていた。父の遺体を前にしても、私はよく分からなかった。父が、亡くなったということを。

母はその日から日に日に痩せていった。私は、母がぼんやりソファに座っているのを見て悲しくなった。性格が合わないながらも、母は厳しく気が強かったのに。ご飯の用意をしても食欲が無いというので、近所のイオンに一人で食へに行く夜が増える。母はまだぼんやりとソファに座って父の遺影を見ている。父の遺影のそばに置かれた百合の花だけがこの家の中で唯一生命力を持つているような気がする。深夜、上の階から階段を降りる足音をきく。母も眠れていないのだろうか。たまたまりビングに行った時、母と会った。また遺影を見つめている。振り返ったその顔には母の涙の跡があった。こういう時、何と声をかければいいのか。でも私は、逃げるように自分の部屋に戻った。心が沈んでいく。私は目を背けた。母の苦しみから。父の死から。頭にはいくつも言う台詞が浮かんた。言えなかった……。翌日は遅刻した。

だんだん母娘二人すれ違っていった。そんなある日、私は父の部屋に行った。ただなんとなく父が亡くなってから一度も入らなかったのを入れてみる気になっただけだ。久しぶりの父の部屋は、生きていた時となら変わりなかった。父の机の上には作りかけのプラモデルがそのままになっていた。私は、それが父が病を完治させて、また続きを作ろうとしていたんじゃないかって、その時本当に父がもうこのプラモデルを完成させられないことが分かった。まだ作ろうとしていたのに。父はもういないのだと。父の部屋にいと昔のことを思い出す。よく勉強を抜け出しては父のところへ行っていた。ひどく懐かしくなって、飾っている写真を見ると、父のギターが目に入った。手にとってみる。コードも分からないけど、適当にひいてみる。めちゃくちゃだったけど、その音が私をなぐさめているかのようだった。私はギターをしている友達に、何か簡単な曲はないかきいてみた。すぐ返信が来て、私はその曲のタブ譜を調べた。タブ譜とは、ギター用の楽譜のことだ。普通のピアノの楽譜とは違う。でも、昔父により方を教えてもらっていたおかげかすぐ理解できた。エレキギターの銀の硬い弦を指でおさえる。昔教えてもらったように、指をたてて、しっかり一本ずつ

押さえる。右手で弾いてみると、綺麗な音が鳴る。昔は今より手が小さくて上手に弦を押さえられなかった。父は根気強く教えてくれたけど、私は面白くなってすぐやめてしまった気がする。入院してしまった父とはよくて週に一度しか会えなかった。私は、昔と違って痩せて弱々しくなった父を見ているのが辛かった。でももっと会いに行けば良かった。ギターを弾きながら、私は父のことを考えていた。

ギターを弾いて一日で私の指先は固く、痛くなった。それでも、また翌日も私は父の部屋でギターを弾いていた。一週間が経って、アンプを使ってみたりもした。父が自作したアンプ。ギターにつないでみたのに、音は変わらなくて、不安になって友達に連絡した。どうやら電源をつけて温まるまで待たないといけないらしい。言われた通り、機械についているボタンをひねって一回全てを0にした。電源をつけてから音を聞きながら微調節するのだ。アンプのことは教わってなかった。もっと色んなことを教えて欲しかった。

ある日、いつも通り練習していると、弦がブチッと切れた。切れた弦はしなれて床にたれてしまった。

「ギター壊しちゃった！」

泣きそうになりながらお母さんにそう言うと、目を丸くして、

「直せばいいじゃない」

と言った。

「直せるの？」

「昔パパがやってたよ。まだ弦も残ってるんじゃない？」

良かった。壊れてない。胸に抱きしめたギターを私はギュツとした。

それから母と一緒に弦をはりかえた。母の目にも懐かしさが浮かんていた。

ギターの弦のように、私達の関係も壊れていてもやり直せるだろうか。今は辛くても、いつの日か笑い話にできるのだろうか。

また後悔しないようにしよう。そう思いながら、私は今日もギターを弾く。